

東家清寶記三編全

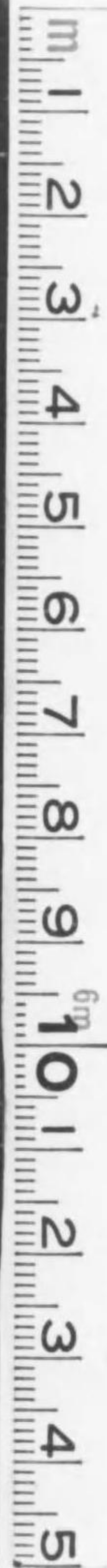
特 279

特279-264



1200501132176

第一千百十四號



始



蘭山高井先生著

農家調寶記 三編

此書ハ男女婚姻の式事等は往時中世の任形相生た跡の形
指し示す所支柱の操やうあるを越え農家用具の用字も書状
手紙等に用ひたる文通の法は相傳り刻印し利便善早利品を重
信古の趣きより四品の刻印と出 早物位付未付く御意り
とありぬ農家に及重き也且江戸書物問屋 和泉屋金右衛門

農家調寶記 三編 目錄

- 民家のく又百姓と別する
- 第一目録 湯方方 ○ 支屏 巻く仕方 ○ 製中の包方
- 相生おむの包方
- 指し示す十二運の操中
- 土用十八九の説
- 湯浴の湯屋月の出入弄法
- 来年宜のまゝなるびに月宜るべき大概と知
- 農家用字 深久衣
- 湯相の式事
- 婚姻の式事 ○ 縁納同儀書中
- 指し示す世界の性操 年十十五
- 指し示す毎年度の吉凶の操
- 年中日の出沒方位と経
- 席ふ出さるる因由
- 書状手紙の包方

○史好重の法は度付二方一射才次よりほして二音ふと意
 二枚うらうら向ふ昆布摘栗の次は桃子抱子砂人武人
 一々こころし 扱世の世話とよる野人若輩して重の二方以後の
 事へふ辰一丸この盡とまで流と砂来てつく。一柱うけて今
 昔人の砂来て桃子は流ばくまへ逃く。桃子よて又一柱うけ
 又くまへく一柱のむ時を重とて元の通とまま一男の方持り
 一じ。男は重はあけく一柱のむとまよとじ。重は下へ世
 中のまよとて一柱看まへ世的砂人のち来て流のまよとまよ介流
 重とて流一柱のまよとまよ重は来て又まへ世。大か
 重は来て一柱のまよとまよ重は来て男の方持り一じ。
 男是とて一柱のむと始の如く重は中へ早一のまよ一じ。
 重は元のどくうらうらまよと史好重とて二方若ぬ一丸
 とりり。又酒のこころしと砂人桃子抱子流二方は引て男
 次起て逃くは砂人のまよ一り。あまはるたよとまよ一り。ね
 申ういさるこころし介流は女の方ふ計居て世話とまよ重は元もまよ
 とまよ一り。丸給は彼まよ一り。去世の重とまよ一り。

史好重の法は度付二方一射才次よりほして二音ふと意
 二枚うらうら向ふ昆布摘栗の次は桃子抱子砂人武人
 一々こころし 扱世の世話とよる野人若輩して重の二方以後の
 事へふ辰一丸この盡とまで流と砂来てつく。一柱うけて今
 昔人の砂来て桃子は流ばくまへ逃く。桃子よて又一柱うけ
 又くまへく一柱のむ時を重とて元の通とまま一男の方持り
 一じ。男は重はあけく一柱のむとまよとじ。重は下へ世
 中のまよとて一柱看まへ世的砂人のち来て流のまよとまよ介流
 重とて流一柱のまよとまよ重は来て又まへ世。大か
 重は来て一柱のまよとまよ重は来て男の方持り一じ。
 男是とて一柱のむと始の如く重は中へ早一のまよ一じ。
 重は元のどくうらうらまよと史好重とて二方若ぬ一丸
 とりり。又酒のこころしと砂人桃子抱子流二方は引て男
 次起て逃くは砂人のまよ一り。あまはるたよとまよ一り。ね
 申ういさるこころし介流は女の方ふ計居て世話とまよ重は元もまよ
 とまよ一り。丸給は彼まよ一り。去世の重とまよ一り。

の製法

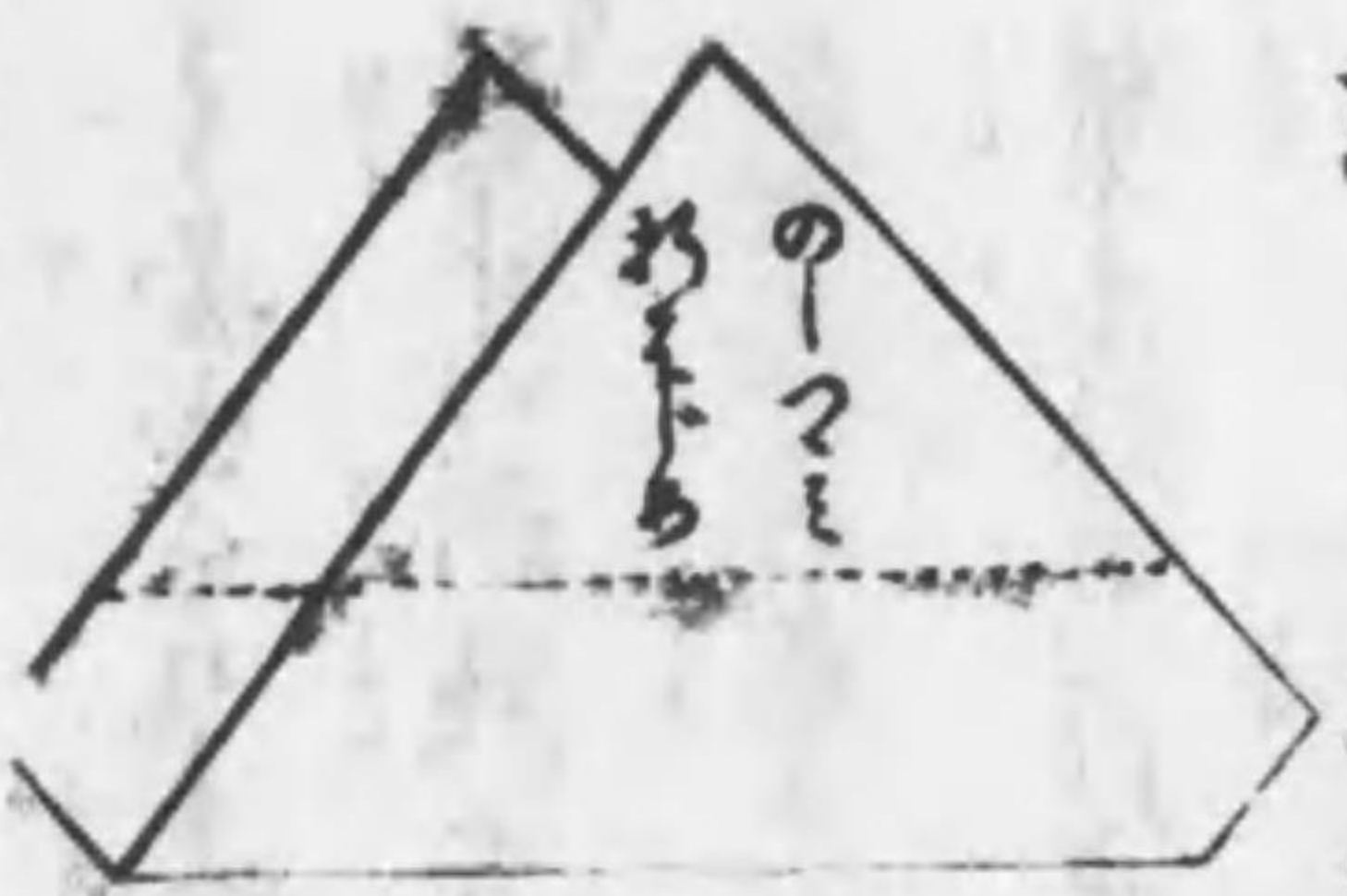
包の



の通名の一階入

の通名の二階入

おまじ紙とよまがらうのまじ紙のまじ紙はあま
通りよりお紙のまじ紙はあまのまじ紙はあま
のまじ紙はあまのまじ紙はあまのまじ紙はあま



のまじ紙はあまのまじ紙はあまのまじ紙はあま
のまじ紙はあまのまじ紙はあまのまじ紙はあま
のまじ紙はあまのまじ紙はあまのまじ紙はあま
のまじ紙はあまのまじ紙はあまのまじ紙はあま



○婿相續とて目下候と云々へ入るるのせは使回
別よ差出り道とては違はれどもとて皆子の候と名
づく者う干着の類と添る略して干着計と云々の候も
けり。或家は結仕とて干着をば送るは仕り損
書いせぬ方はし。先の家内へ悦の傳云も家の家の傳云
もとも。本文の条へ去はけはし。美人を奉向志なせ
書面。家内の傳云をばとて舞と云は候も。或石の
かゆふとはし。妹も外女同士、婿相續里方もも學文とて

だる。唯、唯、唯の生刻と人の性、うひる。うひるの生刻と、
 味、少く、長かり。木といふも、金と刻まれば、木の用と
 るも、金と火と刻せざれば、金と月の用、如く、
 男の女と刻も、女の男と刻も、木と土と。是等、
 細説、予嘗て、いふ、清書、示、蒙、沙と著して、書林、玉、嚴、堂
 小属、き、れ、を、に、不、刊、の、あ、ん

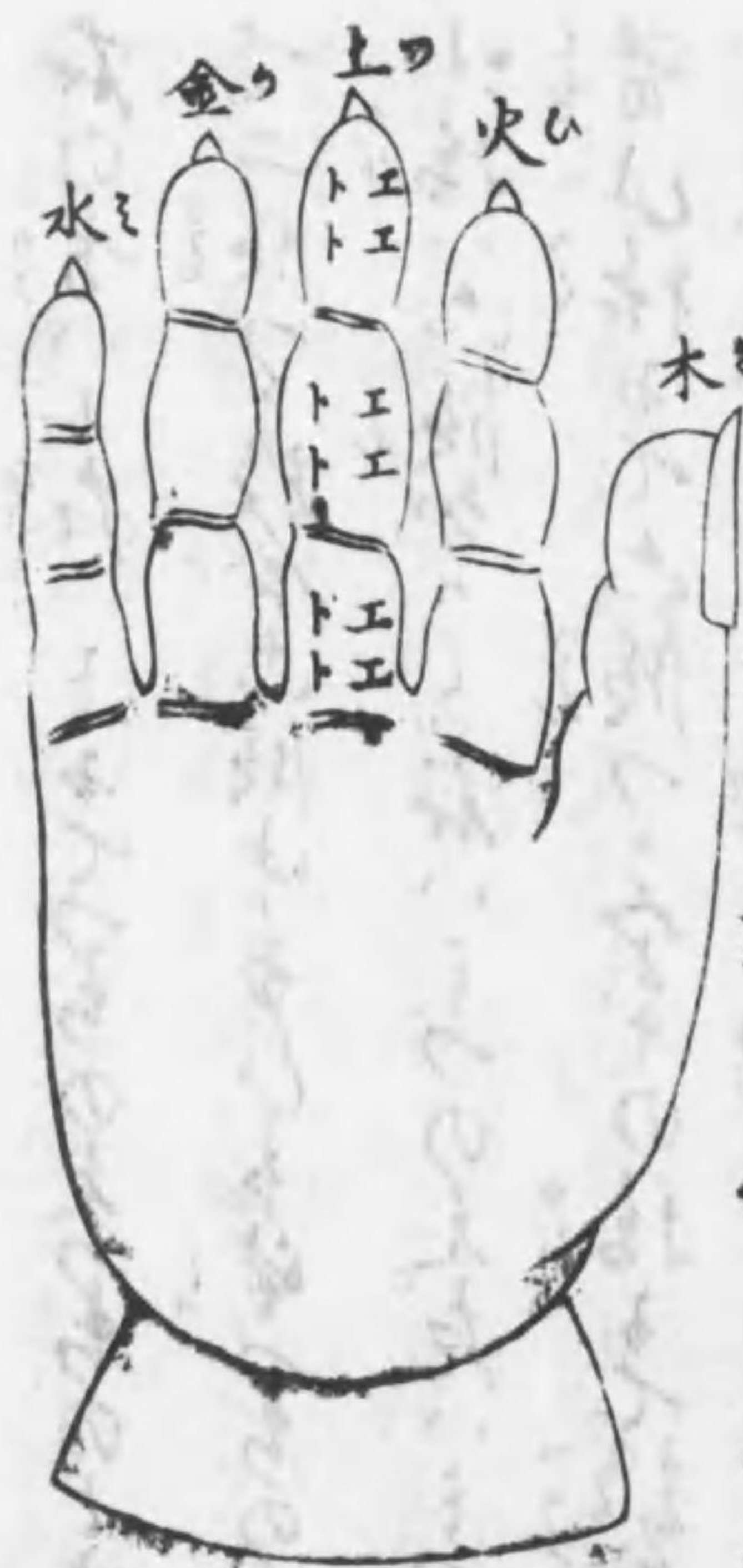
○指頭小千原の性と探

九指、以、ふ、也、と、探、と、教、を、あ、る、中、に、入、の、教、と、は、て、何、の、本、成

一と知。又、何の千かると知。支千の教は、合せて、何の性か、
 妙くは、世俗、一殺、ふ、さ、る、と、も、れ、ん、も、何の、金、性、何の、大、性、と、知
 べ、さ、く、さ、く、い、は、け、及、び、ほ、う、く、彩、よ、子、更、し、て、た、よ、出、せ、る、を

子午 寅申 辰戌
 丑未 卯酉 巳亥

の、秋、さ、く、晴、化、は、く、あ、ま、ら、初、く



△先、指、あ、な、と、き
 ひ、つ、の、こ、と、さ、ち
 中、指、よ、あ、ら、は、く
 一、つ、の、の、ゆ、い、も

右の方、工た、トヤてつちのえつちのと申ひひあま
 て。二限づ、都合と限申ゆびと皆つちのえつちのとなり。
 小指と二限かうら。右いづつのは。丸いづつのと。右乃指
 皆し結きて。六限づ、右の指きて。都合と十なり。十千の
 指は通より。賞へ。大指のかうらふより。まをて
 十二支とあるも。是れ右の指皆と。子丑との限寅
 卯、申、辰、巳、午の限。未、土の限。申、酉、申酉
 酉の限。戌、亥、子の限。未、土の限。申、酉、申酉

指は通より。子丑との限。未、土の限。申、酉、申酉
 甲子乙丑、大指の二とんと。土戌未、大指の二とんと
 と知ぐ

大指 海と水の合よ。小指と右の指。大指の土を
 人指 右の天河。右の土の指。海と土との合よ。
 中指 雷と天の火。海と土との合よ。海と土との合よ。
 小指 雲霧と海。松柏。松楠。白うし。うらたの合よ。土の合よ。
 大指 葉と柳。合満つ。うらたの合よ。土の合よ。

その如く南へは西本代紀等の世は南へくく△支干の
又行甲乙本 丙丁火 戊己土 庚辛金 壬癸水 丑辰未
寅卯 巳午 申酉 戌亥 子丑 寅卯 辰未 巳午 申酉 戌亥
かの丙丁、氣の壯なりは己、氣の化なり庚辛、氣の成なり。
壬癸、氣の終なり子丑、運隆なり寅卯は土、土は居なり
長春なりは年未、言明なり申酉、死終なりは亥、休事なり
是日天と地と子より亥まで一日一用の言明晴の世なり
て流とるも十干と十二支と相合せは理と推てもあり

の流二十本の流とるもあり△十二支の流はくちんも
理なりとては内子、注の極く潜り隠るなり氣と
配を午、陽の極なり配を子、陰の極なり配を卯と酉を
偏して是(陰)情と極なり牛と配を未、陽とて是は流く
乳を極と兼養なり羊と配を寅、陽を極 陽極なり
暴なりゆへ虎と配を申、陰を極 陰極なり
と配を卯と酉、日月出入の二門鬼難なり配を皆一教の物
鬼、雄の毛と極く象感して文らに難、合喘と極は

交て感ぜど辰己の陽起つく夏紀のりの龍蛇の死を成
實に陰斂て静くも静くも物と塵かりと。精もふ
つぐゆけ二つと配せり。以上十二肖属の魂任用するふ足なり

○同十二運のりり中

大指 長は官階帝衰病死墓絶胎養

人指 のねりやううたうしはまのくまののねり本はんたう

中指 とらうたうもまのくまののねり火性ありたり

小指 ちうらうやねねりしはまのくまののねり火性とあり

季指 ちまひつーちうらうのねりちうらうの今運と然り

右通款の覚へ火性の日の年、何の運とわす中指は火性あり

し、何の辰やともい十二辰の終へ大指あり十二辰の終へ引合

ちまひつーちうらうのねりしはまのくまののねり火性とあり

成、何の辰やともい十二辰の終へ大指あり十二辰の終へ引合

ちまひつーちうらうのねりしはまのくまののねり火性とあり

ちまひつーちうらうのねりしはまのくまののねり火性とあり

ちまひつーちうらうのねりしはまのくまののねり火性とあり

申の十日巳より始まるは、指の指より横小、寅寅申巳と
木 火 土 水 金
 賞ま、漸之又横小、木大、令と賞あり、かく賞ま、うら
 賞ふ、及び、火性あり、午と、は、中、指あり、寅巳午と
 寅、同より、指の運、木性あり、午、入、う、老、ま、う、う、ん、は、目、く
 大、指あり、ハ、め、死の運と、知

○同九曜星挿中

年、く、う、る、星あり、吉、凶、と、思、入、各、ま、る、星あり、して、悪、星あり、除
 る、て、世、法あり、い、は、る、い、な、法、陽あり、修、養、者あり、の、業あり、儒、学

天、学あり、絶、て、か、た、く、九、曜、木、曜、火、曜、土、曜、金、曜、水、曜、星、計、都、星
 日、曜、月、曜、星、は、い、は、い、内、星、と、計、と、火、と、土、大、星、は、は、除、の、業、を、い、は、る



け、り、の、中、う、星、曜、星あり、た、の、方、へ
 唯、ま、年、の、殺、さ、る、指、の、業、の、人、あり
 年、の、星、と、見、ん、あり、は、星、土、水、金、日
 大、計、日、木、星、と、十、八、は、あり、知、い

火、曜、星あり、大、凶、星あり、何、業あり、も、い、は、ん、あり、白、た、吉、星あり、大
 凶、土、と、水、は、吉、金、曜、星あり、凶、あり、天、学、家あり、星、曜、計、都、は、自

予二篇の
引合せ見よ

○年中日の出没を概長極

正月節

日出初刻余 夜六時一分余

同中

日出初七刻余 夜六時五分余

二月節

日出初刻余 夜六時五分余

同中

日出初刻余 夜六時

三月節

日出初刻余 夜六時七分余

同中

日出初刻余 夜六時五分余

四月節

日出初刻余 夜六時一分余

同中

日出初刻余 夜六時五分余

五月節

日出初刻余 夜六時五分余

同中

日出初刻余 夜六時五分余

六月節

日出初刻余 夜六時五分余

同中

日出初刻余 夜六時五分余

七月節

日出初刻余 夜六時五分余

同中

日出初刻余 夜六時五分余

八月節

日出初刻余 夜六時五分余

同中

日出初刻余 夜六時五分余

九月節

日出初刻余 夜六時五分余

同中

日出初刻余 夜六時五分余

十月節

日出初刻余 夜六時五分余

同中

日出初刻余 夜六時五分余

十一月節

日出初刻余 夜六時五分余

同中

日出初刻余 夜六時五分余

十二月節

日出初刻余 夜六時五分余

同中

日出初刻余 夜六時五分余

○流沙の盈虚月の出入再疎

二篇の流沙の時を以て記せり。其の大概用舟の量云々のなり。

心解和四 | 入四時

十八	十九	二十	廿一	廿二	廿三	廿四
日	日	日	日	日	日	日
天	人	守	守	守	守	守

乙日	丙日	丁日	戊日	己日	庚日	辛日
卯	辰	巳	午	未	申	酉
寅	卯	辰	巳	午	未	申

日	日	日	日	日	日	日
辰	巳	午	未	申	酉	戌
寅	卯	辰	巳	午	未	申

心解和四 | 入四時

十七	十八	十九	二十	廿一	廿二	廿三
日	日	日	日	日	日	日
甲	乙	丙	丁	戊	己	庚

朔日	小の月	廿九日	廿八日	廿七日	廿六日	廿五日
寅	卯	辰	巳	午	未	申
寅	卯	辰	巳	午	未	申

二日	三日	四日	五日	六日	七日	八日
辰	巳	午	未	申	酉	戌
寅	卯	辰	巳	午	未	申

栗久 栗木 菅束久 方掛紫 山笠 山笠深 揚久 山笠久
 兼房 二葉着久 着細 燻久 紅柄深 紺濃花久 藍指
 藍油紺 萬深 淺葱 今漬 紺 喜白久 淺緑 浅久 美壞
 幸菱 美 美藤深 告紫 牡丹色 友深深 蒲菊深 緋
 碧 源の 翠 浅灰色 正平深 師磨紺 任文指 紋 緩
 信織 源紅 蓮花深 七宝紫 萬蒲華 任文 桂皮久
 檳榔子文 木蘭比 美紅 桃文 桃紅 萌黄 綠黄 柳花
 艾瑪 毛比指 美長山 百入 文換 子紫束 末濃 煤竹
 素海松系 繡箔 漆模花 文柄 乳彩 漆黄 繡紋 加賀紋
 正平紋 切付紋 上経 忌候 △衣裳 公儀 羽織 絹袴
 法被 脛巾 針目衣 芳袴 青袴 瑞袴 結袴 糸袴
 捕鯨 肘袷 復掛 襷裂 縫 鎖袂 巾子 偏被 縁縫
 布子 紫衣 紫子 綿帽子 蒙衣 紋子 禪衾 暑袴
 帷子 肩衣 上下 抱瓦 複忌 蚊帳 糊 法盜 法中
 宿衣 睡襖 寢衣 粗忌 尺指 袴 袂 襪 襪 足皮
 足袋 鞆袖 袂 標 懐 襦 襪 襪 綴 紐 練 絞 足 垢


栗久 栗木 菅束久 方掛紫 山笠 山笠深 揚久 山笠久
 兼房 二葉着久 着細 燻久 紅柄深 紺濃花久 藍指
 藍油紺 萬深 淺葱 今漬 紺 喜白久 淺緑 浅久 美壞
 幸菱 美 美藤深 告紫 牡丹色 友深深 蒲菊深 緋
 碧 源の 翠 浅灰色 正平深 師磨紺 任文指 紋 緩
 信織 源紅 蓮花深 七宝紫 萬蒲華 任文 桂皮久
 檳榔子文 木蘭比 美紅 桃文 桃紅 萌黄 綠黄 柳花
 艾瑪 毛比指 美長山 百入 文換 子紫束 末濃 煤竹

この字少ても書ぬ。後の字は書くと出の字は入る。と云ふ。此の字は、
まぐく候の字は、まぐく候の字は、まぐく候の字は、まぐく候の字は、
書け方の名、如字、如字、如字、如字、如字、如字、如字、如字、
後付、奉入、奉入、奉入、奉入、奉入、奉入、奉入、奉入、奉入、
と書る。通わく、通わく、通わく、通わく、通わく、通わく、通わく、
と云ふ。此の字は、此の字は、此の字は、此の字は、此の字は、
書べし。此の字は、此の字は、此の字は、此の字は、此の字は、

書け方の名、如字、如字、如字、如字、如字、如字、如字、如字、
後付、奉入、奉入、奉入、奉入、奉入、奉入、奉入、奉入、奉入、
と書る。通わく、通わく、通わく、通わく、通わく、通わく、通わく、
と云ふ。此の字は、此の字は、此の字は、此の字は、此の字は、
書べし。此の字は、此の字は、此の字は、此の字は、此の字は、
月日乃一、如字、如字、如字、如字、如字、如字、如字、如字、
の字が、如字、如字、如字、如字、如字、如字、如字、如字、
書く。此の字は、此の字は、此の字は、此の字は、此の字は、
判と書る。如字、如字、如字、如字、如字、如字、如字、如字、
書く。此の字は、此の字は、此の字は、此の字は、此の字は、
のより、如字、如字、如字、如字、如字、如字、如字、如字、

す。封の方ふ二文は。先の名の切まぬやう云。封の方ふ

ぬより云と云て。いろねお封下ても先の名の切まぬ。

い非の方方が。主人親への封の字と云き外に  け通り

おてはし息と二角のどがりへ打つ定法に封の字は陰略

下書へ入けむと云、大なる遠く切封の字  け

ちとふ切熱の時計  けい  けい

状もほのめども表おふ用ぬものか。時と熱の状は

小書と云、非、妻入へう子妻と云とか。日あつて風流

かく。俗の通用第一おせしものゆへ。媚たるとは書雅文と云ん

と云へう。びおまお字にうふ小書とも用役と好要と云下

伯叔父兄 書状返付も紙返りの書雅文と云ん

重に他人 為儀奉見候 為書お下

時候ハ 忌着し前山屋はは紙返も様書も勇健は

為儀奉見候 返事 前ふ出る 振合を云

見と進物おは徳方も前ふ同く。作一物お場へるは

何くお書お掛書。お字をまねい

書留 書状を紙にもおこせらる通わくより

宛名、片苗字小極と書し。け方名宛名と書出仕の紙付も

お小出らる通あてより。人の字じてより

同業 一筆落し仕は 手紙、い紙書し仕は

時假ハ 貴様お見え仕は 手紙、い紙書し仕は

見込ハ 又必要者承知仕は 何れをよし仕は

物と揚ハ 仰し不仕掛も、宛名は合書紙に打寄貴様仕は

書取 右に候はる事なめし、右に候はる紙に候はる紙に

恐惶侍之 通紙、右に候はる事なめし、右に候はる紙に

右に候はる事なめし、右に候はる紙に

宛名は、片苗字小極と書留付、素人、半返紙、手紙

手紙の返り紙付も同紙。但同業より、片苗字小極

口仕寧の類。さあ、同意の用字是

才イサ 出仕イサシ 一筆の世書イツペンノヨシガキ 義イ 手紙の世書テガハノヨシガキ
少目下シヨメゲ 出仕イサシ 一筆の世書イツペンノヨシガキ 義イ 手紙の世書テガハノヨシガキ

時催トキゾロ 義イ 手紙の世書テガハノヨシガキ 義イ 手紙の世書テガハノヨシガキ

見世ミセ 義イ 手紙の世書テガハノヨシガキ 義イ 手紙の世書テガハノヨシガキ

書局シヨク 義イ 手紙の世書テガハノヨシガキ 義イ 手紙の世書テガハノヨシガキ

右に限りて義イ 手紙の世書テガハノヨシガキ 義イ 手紙の世書テガハノヨシガキ

宛名オノナ 義イ 手紙の世書テガハノヨシガキ 義イ 手紙の世書テガハノヨシガキ

子コ 義イ 手紙の世書テガハノヨシガキ 義イ 手紙の世書テガハノヨシガキ

時催トキゾロ 義イ 手紙の世書テガハノヨシガキ 義イ 手紙の世書テガハノヨシガキ

を物い 九尾末の糸を今

お給い 何におら下りて

書簡 中へ送りしは

通牒 大に報へ申す

右へ 左へ送りし

宛名 宛付しは

但し 様お申す

是程 知れぬ

京都 府内

大阪 府内

左方 城下町

て 勅学院

と心 け

をた の

さう の

見下 一

見下 一

見下 一

見下 一

見下 一

根是と清みあふとの一と制。せいの二字と反切。一の一字
 ふつまる。日本限のよみく。和制のよみは。又すじとすじ。シの水
 かり。水まあ、青く又よは。是水の篇、青の考とすじ又
 ふよーとよますもいれんく又和制のよはの一字、ゆのと
 せま、氣あて人の年中のよみはさよりねる。凡教万
 の文字一こふさまぐの理とるふごま、一字もは。何乃字
 とも、く、質と字と知と云之。他を大經文選の素讀左四史漢
 の全讀位の事とて、中し知る事と云は。若しより教万
 卷小眼とすじ。斑白の以櫻の樓ふむで。少し心碑のさあ
 たるん比とるやりー

○日用お場刻

甲申入の玄米百俵。令十あ付廿四俵二分八厘の考場考
 賣。け代金を知り、百俵と云。廿四俵二分八厘小刻。氷
 買を、二百二十七文。買を、令買を、百廿八文が
 二束。俵百十二文へ六とくけ銀と云七ト二リと云。又百十二文
 入を、玄の漬考場と云ん、漬考と云ん、
 俵一俵の入、四年あて、
 二年分考と云ん、し、

○右の束の束の何程のお場五のうらと刻の廿四儀二分

の厘と色四半入の四儀うけ九中七外端と刻の又九中

七外端と合十束のお場と知の九中七外と儀の入四中

小刻は四儀二分の厘と いしあは儀の入はきを速く

○常就お場合三十七束是ふと束増を以束六石六中の代納

何程と知の六石六中入水界費 二十束ふと束は と掛

之十六石 白儀 小刻水六ノ二百八中六又七分をリ二白先

水と合ふと束 子束六石六中と儀 水四十ノと束

七ツよ別くけ七の二十石と儀 たふ七中石と儀 くれゆく石

六中も儀して是見一の儀と八束とて をを

○米廿石時貸小五束 米五束 今積四束と分

浪と直儀 余と米と 儀と儀 中六外入 儀合

と積九束とて 米何程 儀と儀 今積 儀と

と 水 儀と 七 儀と 儀 儀と 儀 儀と

と 儀 儀と 八 儀と 儀 儀と 儀 儀と

か 儀 儀と 儀 儀と 儀 儀と 儀 儀と

中もそふ父のし十敷やれ。まゆかも。まけやも。割のまゆきあて
佐さどらふもつけうらとまらべ。二の版九の版との仕方。右
とつあておぼしうとわかくさく。△見一の割十六かき。先十敷とま
割るまはふか二層の毛も。毛は世人のまふまじしん。たより
を大とをより守りままとはじめて。そ人のま。うまふおんひ
長く。色。毛根根はぬと十六か割をく。たよりのかは右
よりじつてくれ。守りまも。毛二十入り。又米二十入は
十六。毛の程とまは。右より守りまも。まじしん。まじしん。知たと

これにすももも。毛の百か中右へ見一の割。百目は割見えて。
毛は世人の毛をけらるすけて。毛大のま。知る係り。酒
油五物切刻筋。材木何ふても自在。まらへ。一
○家一物はまの時。置りの紙とまらへ。けし。紙はけ。毛も九け
十け。隨意ふ曲ると用べ。まらへは。毛紙をまて九け。おまんと
あつ。けの方ます。まあけ。け知と。一の紙とま。毛先折目
毛はま。毛も。毛はの。けし。毛。一守りま。毛と九か。割
ハ。毛。毛。一の紙とま。知る。まらへ。毛。毛。の。折目。まて。

とうけつと繋はし。百万石と並ばらばらと千七百石あり。

百万石の一割沖がら千石の位。まふ千七百石あり。

○八景惣まふり。其学末熟の用。毎日行方中も並て一月

もつけ。意はらふれ。意違者のかくもの之を預けて運座

まふか今を割付はあらず。一く見合せぬ。留運か

十二万石は百八十六石七斗八升九合と

二ッ小割て。一万余石。八斗九升四合六分

五。一万余石。百七拾石。六斗二升七合六分

四。一万余石。百一拾石。二升七合八分七厘六撮

三。一万余石。八斗。六合六分七厘六撮

二。一万余石。百七十石。八斗。七合七勺。二撮六厘

一。一万余石。九斗。六合。二勺。九厘。六撮。六厘。二撮

八。一万余石。六斗。五合。九勺。二撮。八厘。二撮

九。一万余石。一斗。一升。一合。八勺。一撮。八厘。二撮

同。一万余石。十二万石。百八拾石。七斗。八升。九合。六分

二ッ小割て。一万余石。七斗。七石。七斗。六升。六分

之 卦方。六百七十八石七斗二升。一斗。六石。六斗。二升。
 曰 六子百甲子。一石九斗二升。〇。一斗。六石。
 八 子。廿八石七斗八升六合。〇。八撮。一斗。
 六 百七十八石八斗六升六合。〇。一斗。六石。二
 七 廿四石四斗九升六合九斗。〇。一撮。九斗。八撮。〇。六
 八 二石。〇。一升。合八斗。〇。一撮。〇。一撮。〇。二。六。七。六。二。
 九 二斗。四升。〇。卦。〇。七。撮。〇。一。撮。〇。二。六。七。六。二。
 同九より掛下別。掛言之子四百六十九石七斗八升六合。〇。

九 百七十八石八斗八升八斗。〇。八合。〇。八
 八 八百八十八石八斗八升八斗。〇。八合。〇。八
 七 六子卦百以卦方卦子二百廿五石七斗八升六合。〇。
 六 二億七子。二。百。年。之。子。二。百。廿。九。石。七。斗。六。升。
 八 挂八億六子六百六十六石六斗六升。〇。百甲十九石七斗二升。
 曰 七子卦百六子六百六十六石六斗六升。〇。百甲十九石七斗二升。
 之 卦百廿二億九子九百九十九石九斗九升。〇。百甲十九石七斗二升。
 二 百甲七億九子九百九十九石九斗九升。〇。百甲十九石七斗二升。

同書案

十二万二千四百六拾六石五斗八升九合

二小割

六二七二八二九四八
一八六一八六一八二

四小割

四六二九六二九八七六
二二二二八二七九二七

六小割

二八八八二四六六二八
二七〇七二七二八二七

八小割

二七六七七一六七二七
二〇八九四二七九二七

之小割

一〇二七二四七二五五
二〇二〇五〇九二七二

八小割

四〇九二八八八九〇二
一三三〇二七〇二八〇二

七小割

二二四八四七九二七
一三六八八八八七二二

九小割

一八四三〇九六二

九通久

農家調費記之編 大前

文政五年壬午仲春原刻

安政四年丁巳仲冬再刻

江戸書物問屋

和泉屋金右衛門

横山書屋

終